
魔眼の奏者

桜楼月華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔眼の奏者

【Nコード】

N 6 1 1 1 Z

【作者名】

桜楼月華

【あらすじ】

魔眼。

炎樂。破綻。投影。空遮。狂水。虚無。螺子。

魔眼の奏でる物語は、どこへと向かうのか。どこへと行くのか。どこへと、終着するのか。

止まない雨

病んだ雨

「雨が止まないな」

彼女は、唐突に言った。確かに、ここ数日、ずっと雨続きた。嵐でもないのに、ずっと雨が続く。梅雨の季節でもないのに、雨が続く。

不思議なくらいに、
不気味なくらいに雨は続いていた。

「そう、だね。だけど、君は雨が好きなんじゃないっけ？」

少し茶化そうと思って、ぼくはそう言った。曖昧な笑顔で言った。
だけど、彼女は少しも笑わなかった。

「こんな雨、好きになれそうにないな」

*

*

*

痛い。

荒賀さんはそう言って資料を投げ出した。
めんどくさそうに足を組み、煙草に火を付ける。

「遂にそこまで来ましたか……」

最初は、肝臓。その次も肝臓。その次には腸がなくなり、後の二回は心臓。そして今回も心臓。

肝臓が二つに腸が一つ。心臓が、三つ。

「ああ、俺自身、あんま関わりたいとは思わなかったんだがな。ここまで来ると、見逃すもんも見逃せんだろ」

「そりゃ災難ですね」

犯人が。

そう心の中で付け足しておいた。

荒賀さんが床に放り出した資料を拾い集め、紙の端に書かれた数字を頼りに順番に机の上に広げた。

死体というより、肉塊となってしまうたその「物」は、身体の一部が必ず無くなる。今回で五件目。全員体中ずぶ濡れ。近くに傘はなく、屋内から急いで逃げ、最終的に殺された。というのが、警察側の見解だ。

「ソラー、なんだそれ？」

唐突に背中に重力が加わった。
ぼくの体重を大増量してくれた犯人は見当が付いている。

「また酔っぱらってるの？　まだ未成年なんだし、お酒弱いんだから止めなよ、カノン」

いつもの彼女はもっとクールだし、ぼくに突然抱きついてくることもないだろう。

この場合押し掛かることもない、と言った方が正しそうだけど。

「別にいいだろー。私の勝手だろー。それともなんだー？　お前に私の飲酒を止める権利があるのか？　ああ？」

「全国民にある権利だよ、それ」

いけないことは止めるべきってね。

「お前らいつまでイチャイチャしてんだ。良いから行ってこい。調査だ調査」

「あんた偶には自分で動こうって言う気はないんですか」

「ねえな」

即答ですかそうですか。

ぼくは軽蔑の視線を送ってやった。

二四二三年。八月。

環境的な部分は改善されつつある世界。

しかし世界は、ある能力を生んだ。

魔眼の創設。

荒賀真。椎葉叶望。朽葉宙。

ぼく達三人も、魔眼の持ち主なのだ。

「……今更そんな説明がいるか？」

「いるからソラに言わせてんだよ。おさらいだ。今回の事件、魔眼が関わっているかも知れねえからな」

「で、荒賀さん。今回の魔眼って？」

「知らねえよ。だから今調査してんだバーロー」

ちっ。

「おい今舌打ちしたのどっちだ」

「カノン」「朽葉」

「あーもつめんどくせえ。とにかくだ、調査がんばってこい」

カノンとぼくは半ば強制的、半ば無理矢理に背中を蹴られ事務所を飛び出した。

* * *

「魔眼の調査と言ってもなあ……ねえカノン、どうする？」

「ぼくは資料を読み返しながら頭を押さえているカノンに話しかけた。」

「どうするもなにも、力入れて探るしかないよ。そこら辺はお前に任せるけどな」

「……やっぱりそうなるのか。まあ、いいけどさあ」

「ぼくは少しだけ肩に力を入れた。
それから瞼を閉じる。」

「魔眼なんて言っただって、魔法なんかじゃない。呪文とか、詠唱とか。そういうファンシーなものはない。故に、この力は危険だけを実際立たせる。」

「……………」

「どうだ？」

「ダメだ、なんの痕跡もない。困ったなあ……………」

「はあ…………、使えないなあ朽葉は」

「…………はあ、殺人しか考えてない君がそれを言う？」

「二人して溜息をついた。」

少しだけ見つめ合う。

なにも、変なテレパシーを送り合ってるわけではない。

「ここでやりあってもいいんだぜ？」

「ちょ、落ち着けよカノン。口調口調、男の子になってる」それと小刀ナイフを取りださないで。

「うつさい。ああもう、調子狂うなあホントにさあ」

カノンは後ろ髪をがしと掻きながら、めんどくさそうに瞼を閉じた。

それからまた溜息を吐くと、彼女はドンドン先に歩いていった。しまった。

「……はあ……」

ぼくもまた、溜息を吐いて歩きだした。

* * *

「くるなああああああ……！」

今度は女が私を拒んだ。
怖い怖いこわい。
痛い痛いいたい。

「助けて、よ」

「来ないで！！　くるなああああああ！」

絶叫がその場に響いた。

* * *

「カノン！」

「ああ？」

その悲鳴が聞こえたのは数刹那前。

魔眼を使った形跡はない……。雨は依然振り止まない。
と言うことは単なる殺人事件？

魔眼にしろ普通にしろ、悲鳴が聞こえた。

「こっちだ、カノン！」

ぼくより少し先を歩いていた彼女の手を引いた。

「ちょ、なんだよ。なんか見えたのか？」

「見えたんじゃない、聞こえたの方だ！」

「っ……………」

それを聞くと彼女は顔を真剣にさせた。

* * *

「また一人、死んだ」

なんの感慨も浮かばない。ただ、死んだ。
者から物になっただけ。

ものからモノになっただけ。

或いは、モノからものになったのか。

あたり。

雨の中、聞こえる足音。いけない。この現状を見られては。
咄嗟の行動だった。

この状況、血みどろの……それこそ血の池ができてしまっている
現状をどうにかできるはずもない。だからコンテナの裏に隠れた。
簡単に見つかりそうな場所だけど、その場凌ぎでもいいから隠れる
しかなかった。

「これは……」

足音が止んで数秒、そんな声が聞こえた。可愛らしいとは言えない
女の子の声。

「そう、だね。これまで見てきた中で、一番ヤバイ死体かも……」

今度は苦しそうな男性の声。

これまで見てきた中で。

何度も、死体を見てきた人。私と、同じ？　じゃあ、もしかして、

助けてくれる？ 助けてはくれなくても、心の通える人かもしれない。

ぱしゃっ。

私は、思わず、一步を踏み出していた。

* * *

死体。

これを見てなんだと言われれば、最早肉塊ですとしか答えられない様な産物が出来ていた。

腕は擦れ、脚はあらぬ方向へとへし曲がり、腹部は完全に御開帳。脳漿をぶち撒けて、目玉は飛び出していた。

ぱしゃっ。

その音がしたのと同時に、私は音のした方へと振り返り、小刀を構えた。

鞘に収まっている故、斬ることはできない。だが、防御には使えるし、思いつ切り振り抜けば鞘は抜ける。

「たす け、て……」

足取りも儘ならぬ女が、そこにいた。
構えは取ったままで、私は問うた。

「何者だ」

簡潔な問いだが、女はなにも答えず、なにかを求めるかのように歩み寄ってきた。

女は私のすぐ目の前まで来た、しかしなにもすることはなく、ただ横を通り過ぎた。その先には、朽葉。

「助け、て」

「貴女は……？」

「笹下……笹下、花蓮」

すとな、と。

朽葉の胸の中で女は力を抜いた。倒れそうになったところを朽葉が支える。敵かもしれない女を支えるなんて、朽葉は通常運転。いつも通りのお人よしらしい。まあ、お人よしじゃなくなったら朽葉は朽葉じゃなくなってしまうのだろうけど。

「……カノン」

「分かってるよ。だが忘れるな、そいつはここにいたんだ。その女はここにいた。それだけ、忘れるな」

「……うん」

朽葉は少しほっとした顔で頷いた。

* * *

「で、連れて来ちまったわけ、か……」

「たたく……。ソラのお人よしもここまで来ると、ただの迷惑だな。そう考えながら頭を掻く。」

カノンがソラを庇っていなけりや、疾うの昔にクビになっていたんだが……。そのことにソラは気付かないんだもんなあ。問題って言えば大問題な訳だが……。

まあ、最近ソラの力も知れたから、クビにするなんて有り得んだろうがな。

「とりあえず眠ってしまったので、ここに置いておいてもらえませんか？」

「あ？ ああ、いいよ。置いとけ置いとけ」

ソラのお人よしを利用する様で悪いが、これは好都合と言えば好都合。

まさか、殺人現場にいた犯人かもしれない女を連れてくるとは、思わなかったしな。

* * *

帰り道。

カノンはいつもぼくの送り迎えをしてくれる。ぼくの魔眼は、何気にレアものだ。それを狙ってくる輩が来ない様に、だそうだ。魔眼を知ってる人なんて、そうそういるもんじゃないけど……。

「……なあ、思ったんだけどさ」

唐突に彼女は言った。

彼女はいつも唐突だ。

「あの変態男、あの女になんかしてたりしないだろうな？」

「……………まさか」有り得るから怖い。

カノンも、荒賀さんに何度か襲われたらしい。そんなことに魔眼を使ってくるから、尚恐ろしい。

まあ、荒賀さんの魔眼は、あらゆる意味で良いものだからね。欠点だらけだけど。

「まあ、君が心配することでもないでしょ、カノン」

「……………それもそうなんだが……………」

「なんか気になるの？」

「いや、同情を……………」

「あ、ああ……………そう」

* * *

何かが見えた気がした。

赤くて、赤くて赤くて、赤くて、赤くて。

皮膚を裂かれて御開帳された内臓だった。死体が、イメージできた。子供の頃からだ。

子供の頃の記憶は、あまり良い物とは思えない。
痛い痛い痛い痛い思い出。

「……………ん……………」

そんな思い出の夢を見た気がした。

目が覚めれば、そんな夢と別れられると思ったから、目を開けた。

「……………起きたか」

目を開けた瞬間に見えた顔。

精気の籠らない目。手入れされていない無精髭。そして銜え煙草。

「貴方は、誰？」

「俺か？ 俺は荒賀真だ。ダンディなおじちゃんって呼んでくれてもいいんだぜ」

「……………なんで私、ここに？」

周りを見ると……………あまり、趣味の良いとは言えない部屋だった。そこら中に六芒星や、魔法陣の様なものが描かれている。それだけ見れば、まだファンシーな部屋だと思える。だけど、棚にあるのは挟りだされた目玉や未だ動きを失っていない心臓。脳みそまである。

そんなものを見ておきながら、吐き気などは一切なかった。

「あんななら、気持ち悪いと思えるかもしれねえな」

煙草を口から離し、息を吐く。

虚ろな眼は、どこを捉えるでもなく虚ろなまま、しかし口はしっかりと動いていた。

不思議な男性だった。

「しかし、気持ち悪いからこそ見てみたいと思うのもまた人間の感情の一つだ」

男性は瓶を取った。その中には液体に浸った脳みそ。

「子供の頃蛙を潰して遊んだり、蟻を潰して遊んだり、カブトムシを解剖したりした記憶くらい、あるだろ？ いや、ないか？ あんたは女の子だもんね」

液体に入った脳みそを、男は元の位置に戻した。

「蛙を潰したって、蟻を潰したって、カブトムシを解々にしたって、吐く様なことはなかったはずだ。じゃあ、ここで質問だ。

人間を潰したら、どう思うかな？」

私は、ぎよつとした。

「皆吐きたくなる衝動に駆られるだろうな。

何故だ？

蟻は兎も角、蛙は内臓がある。その内臓を見ても、吐きたくなら

ない。なのに、潰れた死体を見ると吐き気に襲われる。なんでだろうな？」

男はもう一度煙草を口から離した。

しかしそれを口に戻すことはなく、床に落として足で捻りつぶした。

「なぜなら、それが人間の欲望だからだ」

「敵対するもの、或いは弱者。どっちでもいい。潰せばそれで良いんだ」

「虐待されている動物を見て可愛そうだと思うのは当然だ。だが、鰐に食われる鹿を見て、それを可愛そうだと思うのはお門違いだ。なぜならそれが自然だから。自然を見て可愛そうだと思うのは勝手だが、それを助けようとするのは単なる自己満足に過ぎない。なるほど、鹿は助かるかもしれない。だが、鰐はどうだ？ 空腹が苦しいことすら知らないガキ共は、一体なにをした？ 餌を、没収したんだよ」

「ああ、確かに鹿にだって生きる権利はある。鹿にだって食べる権利がある。しかし、人間だって鹿の食べるものを取っていく。環境破壊だ。人は、動物の餌を奪って生きてるんだ」

「だというのに、なにが可愛そうだと？」

「か、可愛そうだと思うのは、仕方ないんじゃないかしら」

私は、聞いていることが堪らず、反論した。

「強きを挫き弱きを助ける。この場合、助けるじゃなくて同情するだけ……だけど、それが人間として普通の感情なんじゃないかしら」

私はそう言い切ると堪らず床を見た。

さつきまで、あんなことをしていた自分が良く飄飄とこんなことを言えたものだ……。

男の、荒賀真と名乗った彼の顔は見えない。

「……ほう。君から、そんな真つ当な意見を聞けるとはな」

随分と心外なものを聞いた、とでも言わんばかりの口調だった。

* * *

「どれ、散らかっていてなにがなんだか分からんだろうが……その黒いに見えるだろ？ それソファだから。適当にくつろいでろ。茶くらいなら出すからな」

お構いなく、とだけ女は言った。案外普通の反応しかしないな……。まあ、構わんが。

女は俺の言った通りに、ソファに座った。だがくつろぐことはせず、それどころか逆に強張っていた。

「俺みたいなダンディなおっちゃんといて緊張するのは分かるが、もう少し力を抜いたらどうだ。無駄に体力を消耗するぞ」

「……………」

「ああ分かってる。なにを取って食いはせん。だからどうか力を抜け。ん？ どうすれば緊張しない環境になれる？」

「……外に」

「あ？」

「外でお話をしませんか？」

……成程、な。ぼうつとしてる様な外見とは裏腹に、なかなか頭は回るようだな。

と言つても、やることはとつくに済ませているんだがな……。

「良いだろう。あんたには、聞きたい話があるからな」

* * *

夜も更けたアパート。古く錆びきつた鉄の階段。それを使って二階へとあがり、三番目の扉をあける。そこが、ぼくの部屋だ。

「相変わらず、片付かない部屋だな」

「うるさいなあ……………」

娯楽も必要ないカノンの部屋は殺風景だ。つまり、娯楽を必要とするぼくの気持ちなど、分かりもしないのだろう。

帰る途中にコンビニで買ってきたアイスを袋から出して冷蔵庫に入れる。それから台所に立ち、やかんに水を入れてガスコンロに火を付ける。

「お茶飲んでいくでしょ？」

「ああ、分かってるのに聞くな」

「あはは……」

微妙な苦笑いをしながら、ぼくは雑誌を開く。
水が沸騰するまでの暇潰しだ。

カノンは適当にテレビのチャンネルをまわして暇をつぶす。いつも通りだった。

「なあ、ソラー」

「ん？」

「……ひっく、……」

「……？」

「えっちいこと、しょうよー」

思考がフリーズした。

「ちょー！ いつからそのビール持っていやがった！？」

「うー、ひっく」

「ああもう、ビールから手放して!」

こうなったカノンを止めるには、切り替えさせるしかない。
しかし、今この状況で切り替えをさせることができるものが何一つとしてない。

「ソーラー」

「な、なに……?」

「んー……」

ぎゅう、と抱きついてきた。
確かにカノンに一度はこうやって抱きつかれたいと思っていた
ってぼくは一体なにを言っているんだ!

「お、おいカノン……そろそろ退いて……」

「やーだー」

ああ、誰か助けて。荒賀さんでもいいから助けて!

* * *

「む?」

「……？　どうかしましたか？」

「いや、なんだか助けを求められた様な気がしてな」

まあ、どうせカノンが酒飲んで絡まれたソラが助けを呼んだんだろうけどな。

イチヤイチヤしゃがって。

俺と笹下花蓮という女はファミレスにいる。日も沈んだ時間。人は多い。

「この状況でなんだかんだと話をするのは、あまり良いとは言えんな」

「え？」

「少しだけ、俺の能力を暴露してやろう」

俺は左目を瞑った。

そして、目を開ける。

「っ！　……っ！？」

まず、笹下花蓮は俺の目を見て驚いた。

魔眼を使うと、目の色が変わる。その上妙な陣が浮かび出る。驚いて、当たり前なのだろうな。

次に、自分のいる空間に、笹下花蓮は驚いた。

そこはさっきまでのファミレス。だが、自分の周りにいる人間は動いていない。

動けない。

「俺の能力は空間との空間との遮断」

「遮断……？」

「遮断した部分は亀裂だとも思ってくれば良い。その亀裂を、自由自在に操り、空間を遮断する。魔眼としては珍しい、空間操縦術って訳だ。つつつても、遮断するだけで、なにができるというわけでもないんだがな」

空遮の魔眼。

それが俺の魔眼だ。

空間を遮断する以外にはなににもできない、優れている様で優れてない能力だな。

「それでは外に出た意味が……」

「言っただろ。遮断する以外に、能力はないんだよ。これから話すことは周りに聞かれたら困るんだ」

ちなみに、空間を遮断したせいで時間が止まっている様に見えるが……実際は今もきちんと時間が流れている。周りから見れば、俺と笹下花蓮は黙って座っている状態だな。

「質問だ。あんたのその眼、一体なんなんだ？」

「眼……？」

……やはり、気付いていないのか。

まったく、面倒事ばかりだな。

「空間遮断能力は、この眼の力だ」

俺は自分の左目を示しながら言う。

「あんたも、少し思っただんじやないか？ なにかが違つと」

* * *

「あんたも、少し思っただんじやないか？ なにかが違つと」

最初、荒賀さんがなにを言っているのか分からなかった。

「魔眼を持つ者は魔眼を感知できるのさ。あんたも、その魔眼の持ち主のはずなんだがな」

「なっ……。私が？」

「そうだ。その右目。さっきからずっと発動してやがる。端から見ればオッドアイだと思われるだけだろうがな」

鏡を見れば良かったかもしれない。そうすれば、こんなことには……ならなかった？

「なにを後悔しているのかは知らんが、意味はないぞ。人間は魔眼のことを利用するんじゃない。魔眼が人間を利用するんだ」

「眼に、意思がある？」

「いんや？ そこまでは言わんよ。だが、意思に近いなにかはある。……願望、とかな」

願望……。

確かに、私は願望のままに……。その願望は、私の願望じゃなくて、この眼の願望……？

「あ……ああ……」

「っ！ 止める」

「え？」

無意識に、手が動いていた。

眼を潰そうと、右手が右目を潰そうとしていた。

そこを、制された。荒賀さんに。その右手を、荒賀さんの左手で制してくれた。

「あ、ごめん、なさい……」

「なに、謝ることはない。……あんたが、今回の殺人事件の犯人で、良いんだな？」

「……………」

「その沈黙は肯定と取るが、いいか？」

「……………」

私は、こくりと、小さく頷いた。

* * *

「ソラー」

「ん？」

相変わらず酔いが醒めないカノンをベッドの上に寝かしておいた。相手は未成年、過ちは犯さない。絶対に。

「雨、止まないな」

「……………うん、そうだね」

部屋に聞こえるのは、テレビから聞こえる笑い声と外から聞こえる雨音だけ。

カノンはベッドが気持ち良かったのか、それだけ言うと寝息を立て始めた。

「……………まあ、仕方ないか」

いつもは事務所の部屋を借りているわけだし。そのベッドは良いとは言えない。動く度にギシギシとスプリングが軋む。そのせいで寝れないと言って多くの部屋に来ることも屢。

「…たく……。普通にすれば可愛いのに」

いつもは男っぽい性格。男勝りって感じかな。
酒を飲むと淫乱女って……。
はあ、なんだかなあ……。

ぼくは床に布団を敷いて、寝る準備を始めた。

* * *

ファミレスで話を初めて、早くも一時間が過ぎた。時計を見ると、既に七時を過ぎ、三十分になろうとしていた。

「……さて、本題だ」

俺は、そう切り出した。

「この雨……、この雨は、お前の能力なのか？」

「……すいません、分からないんです」

「……だよなあ……。はあ……」

「す、すいません」

雨が、おかしいと感じたのはつい最近だ。

あの二人の魔眼が感知できなくなった。あの二人はそれすらも疑問に思っていないらしいが……。

「しっかし、ふざけてるな。魔眼を感知できなくする雨。それを、魔眼で降らしてる可能性があるっていうんだから」

そもそも、魔眼をここまで感知できなくする遮断の力が、これまでにあっただろうか。いやなかった。

これは異常だ。

極めて異例だ。

非常に異変だ。

「あの、この雨は私の力ではないと思います」

「……その根拠は？」

「だって、私の力は……」

壊すことしかできないから。

そう、笹下花蓮は続けた。

「自分の力を理解しているのか？」

「完全には、理解できていません。ですが！ 私は、その力を使って殺してきた……。雨なんて関係なしに、殺してきたんです」

「……ああ、お前、勘違いしてるな」

「え？」

「雨が降っている。雨が降っているんだよ。それが問題だ。そして、お前の眼は二つあるんだ。二つ。二つ。二つだ」

「……………」

「魔眼が一人につき一つだと、誰が言った？」

「っ……………」

やっと、俺の言いたいことを理解したようだった。

「っ……………」

「……………おい、どうした？」

笹下花蓮は、突然に腹部を抑えた。

「いた……………」

* * *

午前三時。

携帯が目覚まし時計化した。おかしい。ぼくの携帯に目覚ましの昨日はなかったはずだし、あったとしてもこんな早い時間に設定したりはしない。

……………いや、ただのメールか。眠い目を擦りながら、フリップを開く。

『目標が逃げ出した。カノン連れてささといこい』

ちっちゃいつ……即ち「っ」が抜けてしまっほど急いでいるらしい。
そんな細かいことを気にしてから、本題の方の意味を理解するのに数秒の時間を要した。

* * *

「なんだよ朽葉あ……私はまだ眠いんだ、寝させてくれえ」

「寝ても良いけど走って！」

「あー……」

夏だというのに外は冬の様に寒かった。雨はまだ止まない。

傘は殆ど意味を成しておらず、しかし、そんな傘の存在意義など今はどうでもよかった。

目標が逃げた？

何故だ。

犯人だから。

うるさい。そんなことは分かっている。

だけど、なんで……。彼女は「助けて」と言っていた。一体なにに対しての「助けて」だ？ きつとぼくだ。もしかするとカノンかもしれないけど、あの眼はぼくを見ていた。ならきつと、あれはぼくに対する「助けて」だ。

「くっそ……」

悪態をつけながら、ぼくは夜の街を駆ける。カノンの手を引きながら、ひたすら駆ける。

「どういことですか！」

事務所について一番に、ぼくは声を荒げた。

「どういこともなにも、メールのまんまだよ。あの女、逃げ出しゃがった」

言ってることと行動がまるで合っていない。

逃げ出したというのに、なんでこのおっさんは冷静に煙草を吸ってられる？

「おいソラ。手が痛いよ」

「え……ああ、ごめん」

気付かないうちに手に力を入れていた。

「そう身の毛が立つ様な眼をしなさんな。テメエの眼は、人を簡単に殺せるんだぞ、ソラ」

「……………」

「感情を乱すな、青二才が」

「熱っ!?!」

煙草をジユツと手の甲に押し付けられた。

「……………なにすんですか」

「お前を落ち着けるにはこれしかなかったんだ」

「逆に怒りと言う感情が乱れに乱れまくってるんですけど」

「気にするな」

もう一度恨めしそうに荒賀さんの顔を睨んだ。

しかしそんなことでこの状況は変わらない。

「そんなことより、本題話せよ、真」

そう言ったのはカノンだった。いつの間にか顔を洗っていたのか、
少しだけ眠気を覚ましてきたようだった。

「……………今回の事件、犯人はあいつで間違いない」

「……………なんで内臓がなくなっていたのか。分かったんですか?」

「そんなの些細な問題だ。……………古来中国では、悪い部分を食べると、
悪い部分が直るそうじゃないか」

最初、荒賀さんがなにが言いたいのか分からなかった。

「肝臓が悪いならレバー、目が悪いなら目玉つてな」

とんとんとんとん、と繰り返される貧乏ゆすり。
音源は荒賀さんの足。いつもはしないはずの貧乏ゆすり。彼がどれだけ焦っているのが克明に写しだされていた。

「そして、笹下花蓮は、殆どの臓器がやられていた」

「っ……。どういうことだ？」

カノンは意味が分からないとばかりに問うた。

「殆どの臓器がって……。そんな……。いや、待ってくれ。それ以前に、食ったのか？ 人の臓器を？」

荒賀さんは無言で頷いた。

それは、ぼくでも信じられない話だった。カニバリズムは、歴史にだけあるものだと思っていた。現代にも、あったのか。共食い……では無い、同類飲食、とでも言った方が当てはまる。そんなことが、現代に……。

「だがまあ、あいつが逃げだすのも、無理はない」

「どういうことですか？」

「……虚無の魔眼と螺子の魔眼だ」

「虚無の魔眼？ なんだそれは」

「……. なんと云うかな……。まあ、簡単に言えば、俺の空遮の魔眼

と似てる様なものだ。空間の遮断ではなく、魔眼の遮断だ」

「……？ 魔眼の遮断ってことは、……どういうことですか？」

正直に、分からなかった。

「だーかーらー」

カノンが大声で、説明してくれた。

「つまり魔眼の気配を断つんだよ。くそ……やられたよ。道理で、魔眼の力が感知できないはずなんだ。殺しが起こったのは決まって雨の日。つまり、あいつの魔眼は事象を起こして、その事象に一定の付加を与えるものだったんだ……」

「……つまり、魔眼の痕跡形跡それ全てを無にする魔眼……てことか？」

「お前が考えてることであってるよ、ソラ。あいつの右目が虚無で左目が螺子って言ったところか。……螺子は分かるよな？ あー、あれだ。ものに触れずにモノを捻じ曲げ、螺旋みたいにする力だ」

「幾らばくでもそれは知ってます……」

「十全で結構。ならば分かるだろ？ あいつは、痕跡を残さずあらゆる事件を起こすことができる。この雨がどんな効力なのかは、まだ分からんしな」

「……？ 痕跡遮断だろ？」

「その痕跡遮断の効果、レベルが分からねえんだ」

レベル……。

ああ、なるほど。確かに、分からない。

魔眼の痕跡を消すだけでも随分な大業。だけど、魔眼にだってレベルがあるんだ。

魔眼の痕跡だけに止まるのか。……自分自身が歩いた痕跡まで、或いは自分自身がいた痕跡まで消せるのか……。

「まあ、ハイレベルの魔眼使いなんてそうはいねえ。早急に、尚且つ的確に事件を終わらせるぞ」

荒賀さんは立ちあがった。

まさか、荒賀さんが出るのか？

それなら、百人力だ。

「あ？　なんだその期待に満ちた顔は。敵索や束縛はソラ、殺人はカノン。お前ら二人で事足りるだろうが」

「……………」

期待したばかりが悪かった。

きつと、カノンもそう思っているのだろう。

止まない雨

病んだ雨

（後書き）

作者の自己満足小説のため、急ぎ足になったり「展開早っ」って感じだったりするけど気にスンナ

境界線

崩壊線

「はあっ……はあっ……」

ばしゃばしゃと、水たまりを踏んで夜の街を駆ける。私が抜けだしてから、もう一時間は経った気がした。私はあの場所にいてはいけない。そう思った。

お前の魔眼は人殺しに適している。

こんな目、要らない……。

魔眼つてのはな、魔法と同じなんだよ。呪文やら詠唱やらを必要としないから、尚性質が悪い。

こんな、目、要らない……。

人殺しに向いている魔眼は、幻想世界を覗く前に、残酷世界を見ることになる。

こんな、目、要ら、ない……。

「くっ……うう……」

なんでこんな目を持ってしまったんだろう。

昔からおかしかったんだ。そうだ、思えばそうだった。ずっとおかしかった。
死のイメージが簡単に出来て、それを見ることになんの疑問もなかった。

それが当たり前だったから。

しかし当たり前だからこそ、誰もがそうなのだと思っていた。
誰もが死体のイメージなど簡単に思い浮かぶのだと。
そう思って生きてきた。

十六歳。そんな長い間、それが普通だと思ってきた。

そんなことが普通なはずないんだ。

「はっはっはっはっ……」

心臓は、ばこばこ動き、きちんと正常に機能しているか不安になる程だった。

「ぐっ!？」

無理に動かさすぎたからか……。体を頭の頂点から股まで一直線に、細い針で貫かれた様な感覚が走った。私は、身体が弱かった。

心臓は激しい運動をすると正常な機能をしなくなった。

肝臓も、腸も。

「なんで、こんな体……」

怨めしい。怨めしい。怨めしい怨めしい怨めしい。

気付くと、私はビルとビルの間の裏路地に入っていた。自らの体を抱えながら、しゃがみ込む。

「少し休もう……」

この雨は、私が降らしているそうだ。無意識のうちに降らしていた。いつ降らしたのかすら覚えていない……。魔眼の痕跡は残らないって、言ってたっけ。

ならきつと、なにかの力を頼りになんて無理だろうし、偶然でも起こらない限りは見つからないだろう。

少しだけ安心した私は、すぐに眠りについた。

* * *

「……………」

「おい朽葉。まだなのか？」

「……ダメだ、やっぱりなにも感じれない」

「お前の魔眼使っても見つからないって……。くそっ」

珍しくカノンは焦っていた。ぼくから見た彼女は、いつもクールだったから、少し新鮮。

しかし、場の状況は最悪。まだ人殺しをするかどうか、定かではないけれど、あの女の子を放ってはおけない。ただでさえ体が弱いという。なら、魔眼という存在を知った彼女の体は……。メンタルに抑えつけられ、きりきりと悲鳴をあげているだろう。

「……………」

「……っ！」

そうだ。少し、試せるかもしれない。

「カノン！」

「ああ!？」

「そんなに怒鳴らないでよ……。それより、少し手伝ってもらいたいんだけど……………」

* * *

朽葉から聞いた「手伝ってもらいたいこと」。最初、私はその言葉を疑った。

「……………できるんだな？」

「もち」

親指を立てる朽葉に、賭けてみようと思った。

左目を閉じて、左眼を開けた。

* * *

さっきまでと何かが違うという違和感に、私は目を覚ました。
しかし、なにも変わっていない。そこに置いてあるゴミ袋。そこに寝ている猫。そして天から降る雨……？ 雨？ 雨が、降っていない？

「……なん、で？」

魔眼が、使えなくなった？
……こんなことなら、眼の使い方くらい教えて貰ってれば良かった。そうすれば……。

「見つけたよ。笹下さん」

「っ！？」

振り返ると、そこには男性が立っていた。どこかで見た顔……。

「カノン！」

「ああ、分かつてる！」

今度は背後から女性の声。

振り返った瞬間、そこにはぎらりと鈍い光を見せる刃。

「くうっ……」

ギリギリで、その刃を避けた。
避けた際の重心のズレで、思わずよろめく。

「ちっ……」

「舌打ちとかするなよ、女の子だろ？」

「うっさい、朽葉」

二人の男女が並んだ。身長差はそこまでないけど、雰囲気全然違った。男性は大人しくて、女性はどこか子供の、対照的な二人だった。

「……………あ、まさか貴方達、あの人の使い？」

「あ？」

「……………あの人、というのは荒賀さんのこと？」

「……………ええ、そうよ」

やっぱり、連れ戻しに来た？

「ただ、早すぎない？ 幾らなんでも……。」

「朽葉、あまり口を聞くな。こいつは殺処分でもいいって話なんだから」

「……ダメだ。今回は助ける。束縛でお願い」

「……はあ」

女性は脱力して、露骨に溜息を吐いた。

「分かったよ、束縛ね、はいはい。承知したよ！」

セーラー服を着た彼女は、突然身を低くした。四足歩行をする獣のように。

そして、駆けだした。

狩りをする、狼の様に。

「っ……」

左目に違和感。いつも、この違和感が来ると、誰かが死ぬ。あの違和感。その違和感。全ての違和感が合わせあった様な大きな違和感。

バギゴキ、バリ。

「っ。が……あ……？」

変な擬音。それから、なにかの苦しい様な声。

「ぐっ……螺子の魔眼、か……」

恐る恐る、目を開ける。

そこには、左腕を螺子の様に螺旋させた彼女がいた。

「カノンっ！」

「大丈夫だ！ 良いからお前は……」

「……分かった」

彼等がなにをしようとしているのか、分からない。

ただ、戦わないと思った。私には、力がある。自分の身は、自分で護る。

* * *

真っ先に利き腕じゃない左腕を差し出して正解だった。

確かに、あいつは私や荒賀と同じで両目が魔眼らしい……。使用方も知らないはずなのに、的確な発動。生かしておけば、良い人材になるかもしれない。まあ、私の疲労が貯まり辛くなることは確かだ。これなら、殺すよりも生かしておいた方が利がある。

「……まあ、あいつを束縛できないと、利は消えちゃうんだけど……」

「……カノン？」

「大丈夫だから、お前はちゃんと期を測っておけ」

「うん、分かってる。左腕は……」

「良い人形師がいる。そいつに頼めば義手くらい幾らでも作れるだろっ」

「……そうか」

そうは言っても、左手が痛いことに変わりはない。いつそのこと捻じ切ってくれば良かったのにと妙な悪態を付けながら、私は右手に持った小刀をしっかりと持ち直した。

左腕の痛みで力が入りずらくなってるやがる。

「ちっ……」

まあいい。

どうせ私は噛ませ犬。束縛は、私に似合わないからね。

「ふんっ！」

「っ！！」

小刀を投擲。

何故私が大太刀などを選ばず小刀を持っているのか。それは簡単なことで、投擲がしやすいからだ。

そして、私の魔眼の力を使うのに適しているのが、投擲という攻撃。

右目を閉じて、

「《投影の魔眼》……発動」

右眼を開けた。

「っ!？」

私の眼が発動したと同時に、そこにあつた一振りの小刀は、二振りへと増える。そして四振り、八振り、十六振り、と、数を増やしていく。

「くうっ……」

名前は確か、笹下……だったか？

笹下は後ずさりながらも、それを避けていく。避けてくれなくては、困る。

小刀の最初に一本など、疾うに分からなくなっている。笹下を追い詰める様に、何十振りもの小刀が地面に突き刺さる。

「《炎樂の魔眼》」

後ろで聞こえた言葉で、朽葉の準備が終わったことを悟った。同時に、投影で増やした小刀で、笹下の周囲を囲むように穿った。

* * *

笹下さんの動きが止まった。

カノンが投擲した投影小刀は笹下さんの足元を囲う様に突き刺さり、威圧感を出している。それが、笹下さんの動きを止めた最大の要因だろう。

そして、これがぼくの魔眼。

「《不殺の戯》！」

……いや、別に厨二病な訳ではない。言葉は現象の力をより一層強くする。つまりはそういうこと。

笹下さんの足元に突き刺さる八本の投影小刀に、魔眼が作り出した炎が纏わりついた。纏わりついた炎は一気に燃え上がり、笹下さんの体を包み込む。

「熱っ！！……く、ない……？ ふ、え……」

どさり。

笹下さんは意識を失った。

《不殺の戯》。

殺さずに相手の意識を失わせる技だ。……というか、ぼくの《炎楽の魔眼》は特性上吸収なのだ。精神力を吸収して気失わせたということだ。

一般人程度の精神力ならこれも十分聞くんだけど、精神力が異常に強い人には効かない。良くて、身動きを封じるくらいか。彼女はまだ魔眼の存在を知っただけの子だ。ただでさえ自分の正体に気付

き精神を消耗させていたのだから、気を失うのは途轍もなく早かった。

「索敵と束縛だけは異様に得意だよなあ、朽葉の力」

「まあ、そりゃあ、ね。投影もいろいろ使い道があって良いじゃないか、ぼくのなんて吸収しかないし」

そう、吸収の特性故に索敵もしやすい。

魔眼は常に吸収している。いや、発動している状態の場合だけど。吸収力が強いからか、魔眼の位置が普通の魔眼よりも鮮明に読みとれる。

嗅覚が強ければ、ちょっと嗅いだけでそれが何なのか分かったり、凄く遠くからでも嗅ぎわけることができる。つまりはそういうことだ。

「さて、と……一件落着、かな」

「ああ、そうだな。笹下はお前が運べよ、朽葉」

「……はいはい、分かってるよ、カノン」

* * *

笹下さんを背負って帰る夜の街。いや、もう朝の町かな。

そういえば、雨が止んでいるのは何故なのかと思う人がいるかもしれない。まあ、至極簡単な話なんだけど……《吸収》したのだ。しかし吸収だ。吸収なのだ。吸収した力の行方は、ぼくの魔眼へ

と蓄えられる。力の容量がオーヴァーすれば、良くて暴走か、悪くて爆発だ。

ならばどうするべきなのか。そこで、カノンの登場だ。カノンの魔眼は《投影》の他にもう一つある。それが《破綻の魔眼》。モノには境界がある。その境界を無くす。即ち破綻だ。

ぼくの吸収にだって限度がある。その限度を境界を、無くした。勿論、《破綻の魔眼》はそれ相応の《対価》が必要となる。それが……。

「そらあ……寝ちゃダメか……？」

限界ギリギリまでの体力だ。

実は言つと、雨を止ませてから一度カノンは眠りについた。経った数分しか休んでいないのにあの戦闘。今起きていられることが奇跡だ。

そしてもう一つの対価。それが、心の^{リミッター}理性だ。

「ううう……そらあ、聞いているのか？」

だからこんなに甘えてくる。

まあ、淫乱娘でも男娘でもなくなるのだから、良いことと言えば良いことなだけど……。

他にももう一つだけ、代償がある。

「歩きながら寝れるなら、寝ても良いよ」

「分かったあ……………」

……本当に寝てしまったのだろうか？

まあ、歩いてくれるのならそれでいい。ぼくの筋力じゃあ、女の

子二人は背負えない。

* * *

空が晴れていた。いやはや久しぶりの光景よのう……。曇天覆う雨の滴りも良いが、晴天覆う日の滴りが一番良い。わしの特性上、雨の方が良いのは重々承知しておるのじやながなあ……。しかし、これも性というもの。

しかし、この世も終わりなき進化を遂げるものだ。

随分前までは、木で出来た家が普通だったものの、今ではコンクリートが普通じゃ。この様な世界では、わしの格好があまりにもそぐわん。

……はあ、昔に戻りたいのう……。

* * *

「で、なんだ？ 結局お前さんは魔眼を持つてると良くて監禁、悪くて殺されると思ったのか？」

「は、はい……」

笹下さんの目が覚めてから、既に数時間も経っている。さっきまでは笹下さんが落ちつくためにいつも通りの過ごし方を

していたが……荒賀さんの方が我慢ならなくなったらしい。何故逃げたのかという疑問を、訊いた。

その答えが、監禁殺人などの被害妄想だったということだ。

「俺がそんなことするわけないだろう」

「で、でも。……その女の子も、『殺処分』とか……なんとか……」

「ああ、頼んださ。だがそれはあんたが同行を拒否した場合だ。当たり前だと思わねえか？ 眼の使い方も知らねえ。しかもその目は《螺子の魔眼》ときやがった。殺処分もやむを得んと思わんか？」

「そ、それは……」

その眼を、人を殺すことに使ってきた彼女からすれば、それは重々承知なのだろう。分かっている。だから被害妄想が先走って、この場所から逃走した。この現実から逃避した。

「じ、じゃあ私はやっぱり殺され……？」

「なあに勘違いしてんだバカたれ。あんたには魔眼の使い方を知ってもらふ。そして、働け」

「……え？」

「……え？　じゃねえよ」

声まで似せての台詞反復……高度な技術。ていつか荒賀さん、声帯模写できるんですか……。

「だーかーらー」

さっきまで疲れてソファで寝ていたはずのカノンが起きて、話に交わってきた。

「つまり荒賀のおっさんはあんたに魔眼の使い方を教えてやるから、その代償でここで働けって言ってるんだよ。疑問に思う前に感謝しろ」

「……………」

「笹下さん、二人とも口は悪いけど、貴女を歓迎したいんです。だから」

「おい朽葉。勝手なこと抜かすんじゃない」

「そうだぞソラ。これは対価だ。無償でなにかを教えて貰えるほど、世の中甘くねえんだよ」

「……………二人とも、いい加減に」

「分かりました」

いい加減にしないと怒る。

と言おうとしたところで、笹下さんの凜とした声が部屋に響いた。

「それじゃあ、お願いします」

「……………おう」

「……………おっ」

さっきまでのおどおどした彼女とは対照的だったからか、カノンも荒賀さんも少しだけリアクションが遅れた。

二人の吃驚顔。……レアだ。

* * *

「つつふふ」

笑い声が、部屋に木霊した。

割れた硝子。割れた花瓶。割れた画面に割れた仮面。

「……………久しいのう、木賀の者よ」

「いやはや、本当じゃ。いつか聞いた小鳥の声が聞こえたと思ったら……貴様じゃったか、女狐よ」

「ふん、昔は奇術師として恐れられた貴様も、今では単なる魔眼師へと成り下がったわけじゃが……。どうじゃ、いつぞやの因縁など忘れ、ここらで一手、手を組んでみないか？」

「断る。言うまでもなからうて」

後ろで長い髪を束ね、腰に刀を差し、煌めく眼光は侍そのもの。ふん。まさか、この時世に出逢うことになるとは、正直予想もせなかったわ。

「何故じゃ」

「貴様と共にいたところでわしに利があるとは思えんのじゃ」

利、ね。

これはまた、つまらない理由で断られてしまったのう……。

「そもそも、《木賀の血》と《斉賀の血》であるわしと女狐が交わることなどできまして」

「おやおや、随分とつまらないものに縛られておるのじゃな？ 《荒賀の者》は過去を受け入れ、私を受け入れてくれたぞ？」

《三大の枷》。

そう呼ばれたのも、今では懐かしいものじゃ。

「ほう、なんと……荒賀が？ 面妖な……」

「貴様が思うとるより、今の世はなかなか面白いぞ？ 貴様のその《眼》。その眼も、今では奇などではなくってしもつた。私もまた同じじゃがの」

「ふん。そんなこととつくの昔に気付いておるわ。最近は、眼を持つ者が多くて飽くこともなき。良い世になったものじゃ。……じゃが」

「昔の方が、良かったなあ。今では大きな建築物が多すぎる」

「正しく、激しく同意せざるを得ないな、それは」

しかし……この男の格好、なんとかならんのかのう……。昔ならまだしも、今の世に侍の格好はないじやろう。刀すら隠していないなど……。良くてこすぶね。悪くて不審者扱いじやのう。

「なんじゃ、その目は」

「貴様、スーツなどと言うものを着てみないか？」

「……………む？」

* * *

事務所に地下。そこには、趣味の悪い部屋がある。

事務所の裏の姿……いや、真の姿と言うべきだろう。

そこに、ぼくと、未だ疲れが取れないのだらうふらふらと危ない足取りのカノン、そして笹下さんと荒賀さんがいた。

「カノンの左手だが……こいつは大丈夫だ。斉賀つつー最っ高の人物師がいる。昔は単なるポルターガイスト女だったんだけどなあ……」

……」

「何か言いましたか？ ポルターガイストとかなんとか……」

「いんや、こつちの話だ気にすんな」

「はあ……」

溜息の様な返事をするしかなかった。
それにしても人形師……。義手を作る人形師なんて、ぼくは聞いたことがない。

でもまあ……。世の中はぼくの知らないことだらけ。固定概念にとらわれていたら、生きていけない、か。

「んー……。どうかしたのか？ ソラ」

「いや、なんでもないよ、カノン。それより、目はまだ……？」

「うん、見えない」

《破綻の魔眼》の代償で、カノンの左目は盲目状態。
しかし、長い。

いつもは一時間ほどで見えるようになるはずなのに……。

「だからガタが来てんだろ。《破綻の魔眼》は、それほど危険なんだよ。あんま連続で使うんじゃないって言ったはずなんだがなあ……」

「……………」

危険なのは知ってたけど、連続で使っではいけないのは知らなかった。

思わずカノンの顔を凝視した。

「……………言う暇がなかった」

「まあたそこういう言い訳を……………いや、まあいい。それより、ソラ。」

てめえそのメガネ外してねえな？」

「当たり前です」

荒賀さんも、用心深い人だ。

幾らばくでも、このメガネを外す様な愚行を犯すわけがない。

「それより、その人形師はまだ来ないのか？」

「ああ。……そろそろ来ると思っただがな。とりあえず斬るか」

「え！？」

笹下さんが一際大きな声を出した。

何事かと、ぼく等三人の目線が笹下さんに突き刺さった。

「き、斬るって……腕を切るんですか！？」

「……ああ、そりゃそうだ。じゃなけりや義手も付けられんだろ」

「カノンさんはい、いいんですか、それで！？」

「ああ、別に……。使えない腕をくつつけてても意味ないしな」

カノンの言い分は当たり前だ。

笹下さんがなにを言いたいのか、理解できない。

「い、痛くないんですか……？」

「痛いよ？ すっごく」

「あう……えつと、ごめんなさい……」

「いや、別に良い。ほら、おっさん。早く斬ってくれ」

「急かすなよ」

「つて、やっぱり斬るんですか!？」

「おいおい、話が見えねえな。あんたは一体なにが言いたいんだ？」

やっと荒賀さんが質問をしてくれた。

ぼくとしては妙に会話に入りづらかったから、助かった。本当なら、そんな空気読まずに訊けばよかったんだけど。

「き、斬るだなんて……」

「……ああ。ああ。ああ。分かった。あんた、斬るのが痛くないのかって言いたいんだな」

「……………」

笹下さんは全力で首を振って肯定した。

「それなら安心しろ。俺の《空遮の魔眼》使えば痛みすらねえから」

荒賀さんは左目を閉じて、左眼を開けた。

「《遮断》」

音もなく、見えることもなく、変わるのは荒賀さんの眼の色のみ。そして、カノンの左腕が、ねじれてる部分から途絶えた。それから、どさりと腕が床に落ちた。

「あー……なんか一気に軽くなった」

「腕一本だけでも、結構重いからな」

そう言いながら、荒賀さんは床に落ちた腕を回収した。恐らく、義手の基盤にでもするのだろう。

「……大丈夫、カノン？」

「ああ、痛いのは慣れてるさ」

対して痛くなさそうに、カノンは言った。

「あ……ああ……」

笹下さんは、なぜか口をあんぐりと開けていた。

「……荒賀、さん？ その……空遮の力は人を殺せないんじゃない？」

「なに言ってるんだ。俺は『遮断する以外に、能力はないんだ』って言ったんだぞ。人を殺せない、ましてや斬れない等とは言っていない」

笹下さんは口パクで「だまされた」と言った。

……まあ、荒賀さんの嘔吐きは趣味を通り越して癖と言ってもお

かしくないし。

「……ああ、もしかして……」

あの時の、笹下さんが人間の内臓を食ってるという話も、嘘なのかもしれない。

後で聞いてみるのも、良いのかもしれないな。

「ちなみにで細くしといてやると、俺の《空遮の魔眼》は『時間操作空間操縦術』の能力ってことだ。空間遮断で相手の腕を囲めば、その腕は斬れる。時間遮断を使えば、腕の動きが止まる。そういうもんだ」

腕の動きが止まると、血のめぐりも止まる。腕に行った分の血が心臓に戻らない。それでも死なない。つまり、生かしながらの詰問に使うことが多いのが『時間遮断』らしい。四肢を時間遮断で囲めば、相手の身動きを奪った様なものだ。空間操作時間操縦術というのは名の通り空間と時間を操っているわけで、時空を破壊する程の力がなくては、それを壊すのは無理だそうだ。

「空間の力だからな。応用すれば、空間で出来たカッターができるというわけだ」

そう言っただけで荒賀さんは、ちらりと横を見た。ぼくとカノン、笹下さんもそちらを見る。

変な擬音を、なにかが立てた。

「……今の音が遮断だ」

そう言って荒賀さんは、机に置いてあるビーカーを手を取った。
しかしそのビーカーの下半分は、机に置かれたまま。
ビーカーが両断されていたのだ。

「遮断つっーのは『断つ』ことであり、『遮る』ことなんだ。空間を遮り、空間を断つ。それが、俺の力だ」

「ちなみに私の力は《破綻》だ」

何故かカノンが話にまじってきた。
それに対し、笹下さんは首を傾げた。

二人は既に説明する気はないらしく、眼をつむっていた。

「……つまり、《破綻の魔眼》っていうのは『境界を無くす力』なんだ。まあ、とても揶揄的な説明だから、なかなか理解できないかもしれないけど……。例えば、さっき荒賀さんが両断したビーカー。あれの中に水を入れ続けると、どうなる？」

「……どうなるものにも、溢れるわ」

「そう。その通り。だけど、《破綻の魔眼》を使えば、それは溢れないんだ」

「……どうして？」

「ビーカーの中と外の境界を無くしたら、水は永遠に入る様になる。それは境界がないから。際限がないって言う方が良くかもしれない」

「……具体的に、水はどうなるの？」

「……具体的に？ ……ああ、具体的にね。水はどこに行くのかってこと？」

笹下さんはこくりと頷いた。

「どこに行くのか、っていうのは、まだ解明されていない。魔眼だって、まだ謎だらけなんだ。ただ、解っていることを言うならば、ビーカーの中に入ってるはずの水は、どこかに行ってしまうんだ」

「……そのどこかが解明されていない……」

「そう。そして、《破綻》は大き過ぎる力故に、《世界の修正力》が働く」

「世界の、修正力？」

「そう。世界にあつてはいけないエラーを直すんだ。境界がなくなることは、大きなエラー。だから、カノンが破綻の力を抑えた瞬間に、境界は復活する。……さっきまでのビーカーの例えで言うなら、『大量の水がビーカーに現れ、あふれ出ていく。下手をすれば、ビーカーが割れる程の水が唐突に出現する』っていうこと」

溢れ出ることを暴走と例えれば、割れることは爆発だ。

……なんの話かと言えば、笹下さんと相対する前に、ぼくの《魔眼》の話だ。《虚無》の力を吸収するのは初めてだし、あそこ一帯にあつた雨雲を全て吸収するのと同じことだった。絶対的に、『爆発』は免れない。爆発は、即ち魔眼の死とされている。爆発と言っても具体的に爆発するわけではない。ただ、魔眼は使えなくなり、その目は一生涯盲目になるということだ。

ぼくは両目が《炎樂の魔眼》だから、一度爆発すると両目が見えなくなる。それだけはご免被る。

ちなみに、貯め込んだ力は一度、全てを解放することで爆発を免れた。境界を無くす力に時間制限はない。ただ、時間が長ければ長いだけ疲労が大きくなるというくらいだ。……今日で、盲目の時間が長くなることも判明したけど。

時間制限がないから、ゆっくりでも力を解放していく。そして空っぽになった瞬間に《破綻の魔眼》を再度封じてもらう。

……それでも暴走しかけたのは、言うまでもないのだけど。

ぼくが無言になったからか、少し不審そうな顔で笹下さんに見られた。その瞬間、爆発がした様な音が、部屋の出入り口から聞こえてきた。

「なっ!？」

思わず叫び、その方向を見る。

「……よっ、荒賀」

「……よう、斉賀」

気軽な挨拶。荒賀さんの知り合い？

前髪ぱつつんで、白人の様に白い肌。頭には、お祭りで良くするよ用に、左眼部分が欠けている狐のお面が付けてあった。背中には大量の荷物が入っているらしい、バッグを背負っている。

「……いやー、カノンちゃんも久しぶりじゃのう。最近会ったのももっ数年前じゃったか？」

「ああ、久しぶり、月白」

カノンまで知り合い!?

知らない者同士、笹下さんとぼくは目を合わせて首を傾げていた。

「お主ら、親睦を深めるのも良いが、わしにこの者たちの紹介をしてくれてもよろしいのではないか？」

少し遅れて、黒スーツを着た長髪ポニーテールの男性が入ってきた。

「ああ、悪いのう。……その女子は椎葉カノン。男勝りな性格な上に剣を使う、お前好みの女じゃな」

「……わしの好みを勝手に決めんでもらえんか？ 齊賀よ」

「……お前、木賀の……。なんでお前が？」

荒賀さんの吃驚顔。なんだか今日は良く見るな。

「なに、その女狐に連れられてな」

「……スーツ」

「む？」

「似合わねえな」

「……………」

「あつははは！ やっぱり似合わんか！ 私も思ったんじゃよ、似合わねえって」

「貴様等……、余程死にたいとお見受けした。そもそも斉賀、貴様が着ると言っただのではないか！」

「仕方なかるう。今の世をあんな服を来て歩いたら祭りがあると勘違いされてしまうわい」

なにやら三人の間で論争が始まっていた。
なにがなんだか分からない。

「月白とおっさんは昔からの友人なんだとさ」

そんなぼくの表情を悟ったのか、カノンが教えてくれた。

荒賀さんに友人……もしかして、この人がカノンや荒賀さんが言ってた人形師？

「そういえば、カノンちゃん。どこかアンバランスになってしまったのう？」

斉賀さんはカノンの腕を見ながら言った。

「ちょっと、いろいろあつてな」

「だからお前を呼んだんだ。今では人形師として名も売れたお前ならば、人間の腕と然程変わらない程度の義手くらい作れるだろう？」

「……確かに、作れんことはないじゃろうな。どれ、ここには丁度

良い素材が大量じゃからな。さつそく作ることとしようか」

斉賀さんは背に持っていた荷物を床に置いて、チャックを開けた。

* * *

追い出された。

人形師にとって作成中の姿は見られてはいけならしい。

「別に、見られてはいかんという決まりはなかるう。これは斉賀の女狐が自分勝手に決めた決まりじゃ」

「そうなんですか？」

「うむ。……紹介が遅れたな。わしは木賀秀侍という。小僧、貴様の名は？」

「朽葉宙です。カノンはさっき紹介されたから分かりますよね」

「ああ、分かっておる。しかし、何故腕を取る破目に？」

本当に疑問なのだろう。顔には「まるで分からない」と書いてある様だった。

「少し仲間内でもめ事があってね。なあ、笹下」

カノンは嗜虐的な目線で笹下さんを見た。

「あう……えつと……その……」

「あんま虐めんじゃないよ、カノン」

「いてっ……」

とりあえずグーで頭を殴っておいた。

「ふむ……まあ、元気が良いことは一番じゃ。ところで……朽葉と言ったか？ 貴様、ちとわしと死合おうてみんなか？」

「なっ……？」

死合っ……。つまり、戦えっということか？
なんでまた？

「なに、わしの余興に付き合えというだけじゃ」

「おい斉賀。俺の部下を殺すんじゃないぞ」

いや、そこじゃなくて殺し合いを止めてくれ。

「情けをかけるなどあつてはならぬ。死ぬか生きるかはこの小僧次第じゃないか、狸？」

「狸って呼ぶの止めるよ。もう、俺にあの力はねえ」

「……なるほど、消えたか」

「ああ、随分前にな。……ソラ。いつその事この戦闘馬鹿の相手し

てやれ」

「で、でもどこでやれっていうんですか……」

まさか事務所内ですとか言わないよね？

ただでさえ散らかってるのに……。その上壁に穴空いたりしたらいろいろ叶わない……。

「河原で良いだろ」

「人目につきますよ。今昼なんですから」

「俺の得意分野」

「え？」

「魔術だ」

「……ああ、そうですか」

つまり拒否権はないんですか。

* * *

そんなこんなで河原に到着、というわけですが……。
如何せん、ぼくは戦闘狂じゃないし、戦闘好きでもない。ましてや戦闘民族でもないぼくが、なぜこんなことをしなくてはいけない

のか。今、ぼくは、全国にその疑問を発信したい。

「なんでぼくなんですか？ カノンじゃダメなんですか？」

「私パス。めんどいことはやらない主義だし、目え見えないし」

「……確かにわしもそちらの女子とも死合ってもらいたいのじゃが、ああ言っておることだしのう」

つまりぼくはカノンの代替品が。
不幸だ。

「じゃあ荒賀さんは？」

「なんで俺が今頃侍と殺り合わないといけねえんだよ。流行が遅れてるお前の方が、いろいろ気が合うんじゃないかねえか、ソラ？」

「ぶっ飛ばされたいんですかアンタ」

さらっと気にしてること言いやがって……。

「ああ、そうそう。そいつとやるなら、メガネ外しといた方がいいぞ」

……。

いつもはそれを止める立場である荒賀さんが、それを言った。ぼくは少し、理解ができなくて、思考が停止していた。

「さもねえと、死ぬぜ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6111z/>

魔眼の奏者

2011年12月20日15時49分発行